



Title	古漢語における造語法の解明：孫玉文著『漢語変調構詞研究』
Author(s)	鳥羽, 加寿也
Citation	中国研究集刊. 2019, 65, p. 69-81
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76124
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

古漢語における造語法の解説

——孫玉文著『漢語変調構詞研究』——

鳥羽加寿也

本文に入る前に、まずお断りしておかなければならぬことがある。本書は二〇〇〇年に北京大学出版社から出版、増訂を経て二〇〇七年に再版されたものである。

増訂前のものについては、すでに水谷誠氏による書評（創大中国論集二〇〇二年所収）があるため、本文は屋上屋を架すことになつてしまふかもしれないが、本書が「変調構詞」研究における最重要文献であり、かつ上古漢語の文法や音韻を研究する際にも必ず参照すべきものであることも考慮し、再度紹介する必要があると判断した。本書評では、先行書評とはなるべく異なる視点から紹介することを試みる。

一、「変調構詞」という概念について

本書は、古漢語における変調構詞現象について例証する研究書である。後記によれば、もと著者の孫玉文氏が北京大学に提出した博士論文であつて、一九九六年春から執筆に着手し、一九九七年春に書き終えたということである。その論文は提出後、北京大学や北京市、更には教育部や国務院に優秀な博士論文であると認められたという。実際に本書を手に取り、変調構詞の個々の例証の部分を一読すれば、誰であれその資料の膨大さと考察の周密さに圧倒されることであろう。

内容についての説明に入る前に、まずは「変調構詞」

という言葉についての説明が必要であろう。「変調」とは声調を変化させるという意味である。周知の通り、現代中国語（普通話）には四種類の声調が存在し、それぞれ第一声・第二声・第三声・第四声、或いは中古音との関連を重視し、陰平声・陽平声・上声・去声と呼ばれている。隋唐時期の中国語（中古漢語）にもやはり声調が四種類存在していたが、その内訳は現代中国語とは異なる、現代中国語には存在しない促音声調（入声）が存在する一方、平声は陰陽に分れておらず、四声調はそれぞれ平声・上声・去声・入声と称されていた。隋唐よりさかのぼり、漢代や先秦時代の中国語については、そもそも声調が存在したか否かが議論となるのであるが、本書では、中古の去声を二分し、計五種類の声調（平声・上声・去声・長入声・短入声）が存在したとみなしているため、「変調」と表現しているのである。

次に「構詞」についてであるが、これはある基礎となる語（以下原文中國語に倣い「原始詞」と呼ぶ）から新しい語（原文「滋生詞」）を創り出すということである。

つまり「変調構詞」とは、声調を変化させることによつて新語を創出する現象である。この現象の名残は、現代中国語における一字多音に見ることができる。例えば「説」の字には、shuoとshuiとの二音あり、前者は一般

的な動詞として「言う」の意味で用いられ、後者は「遊説」youshiのように、「説得して何かをさせる」という意味で用いられる。この場合は、入声の「説」から、去声の「説」が派生し、現代中国語の二音は入聲音と去聲音をそれぞれ受け継いだ読みであるというわけである。「変調構詞」はまた、広く見れば「変音構詞」（字音の一部を変化させることで新語を創出する現象）の一部である。例を挙げれば、見母（上古再構音^{モウ}）の「見」から匣母（上古再構音^{モク}）の「現」が派生する現象は、声母の清濁の交替によつて行われているため、「変音構詞」ではあるが「変調構詞」ではないというわけである。

「変調構詞」の説明が済んだところで、以下内容についてみていくこととする。

二、第二章の要約

本文は二章構成になつており、第一章は「古代漢語変調構詞表」と題し、王力氏の上古韻部によつて配列された、百の語について、それぞれ先行研究及び『玉篇』『廣韻』『集韻』での原始詞と滋生詞の採録状況を確認した後に、統いてそれらの例証及び歴史の中での発展過程

の考察、旧説への反駁が続く。第二章は「漢語変調構詞的若干理論」と題し、第一章の内容を基礎として、変調構詞の性質や分類などについて、理論面からの考察が行われる。

本書の主要部分は第一章であり、第二章は第一章に比べて分量も少なく、あくまで副次的な部分であると思われるが、第一章の内容及びその評価については、先に述べた通り、水谷誠氏による、自身の研究の成果との比較も交えた優れた書評が既にあり、また第一章は「表」であるという性質上、要約しての紹介が難しいため、本文では第二章の紹介を行いたい。

第二章は先にも述べた通り、「漢語変調構詞的若干理論」と題され、第一章を前提として、理論面の議論を行う章である。章の下は更に六節に分けられており、それぞれ「論変調構詞的性質」「論変調構詞中的字和詞」「論変調構詞和詞義構詞的関係」「論変調構詞和変声構詞、変韻構詞的関係」「論変調構詞中原始詞和滋生詞的関係以及変調構詞的分類」「論上古漢語已有変調構詞」と題されている。以下、節ごとに内容を紹介する。

第一節はさらに三部分に分けられ、それぞれ「論変調構詞是漢語口語的反映」「論變調構詞是構詞法」「論所謂經師注音不一致」と題される。

「論變調構詞是漢語口語的反映」では、まず変調構詞という現象について、清代の学者たちは、これを隋唐時期の学者たちが人為的に読音を区別したものであると考えていたことを述べ、その原因是、清儒が南朝の学風を嫌い、色眼鏡を通じて「音義の学」を見ていたところにあると指摘する。また、人為説の背景には、「音義の学」が変調構詞の衰退期に成立したことと、口語に対する軽視があるとする。統いて、現代の言語学者であっても、現代漢語の口語の中に痕跡のない変調構詞については、やはり人為的なものであると判断することがあり、これは伝統の影響であると同時に、変調構詞を反映している文献資料を十分に重視していないためであると述べる。統いて、変調構詞を人為的なものであるとみなすことにによる矛盾を挙げる。第一に、変調構詞は「音隨義轉」現象の一部であるが、これを認めないとすることは、清代の学者たちが用いた「因声求義」の方法と矛盾する。第二に、経師たちの間で、音と義の関係や、複数の読音の内どれを「如字」音ではないとするかに一致が見られるることは、人為説では説明不可能である。第三に、語の二音節化が進んでいた中古期において、それを差し置いて、一語一音節時代の造語法である変調構詞を用いて人為的な造語が行われることは不自然である。第四に、人為説を

正面から証明する根拠が存在しない。第五に、人為説論者の中には、異なる字で書かれた滋生詞は非人為的とみなし、原始詞と同じ字で書かれた滋生詞は人為的であるとみなす者があるが、この考えには矛盾がある。第六に、原始詞と滋生詞とで意味に細微な違いしかないものについて、それを人為であるとする説があるが、それは客観的な見方ではない。統いて、六朝以降の口語を反映する資料によつても、六朝の学者による変調構詞の描写は、口語の反映であるということが明らかになると指摘する。その内訳は以下の通りである。第一に、韻文によると、南朝であれ北朝であれ、当時の口語には変調構詞現象があつたことが明らかである。第二に、口語による数民族言語における借用語からも、北京語には痕跡のない変調構詞の痕跡がうかがい知れる。第三に、現代方言や少額など近代の資料にも、現在では消滅した変調構詞が記録されている。第五に、漢字の字形もかつて存在した変調構詞の傍証となる。第六に、言語類型的に見て、声調を有する单音節言語では、声調の交替によつて造語が行われることも、当時の口語に変調構詞が存在した傍証となる。

「論変調構詞是構詞法」では、まず、一部の語について、原始詞と滋生詞の語義に差がないとみなす、段玉裁や楊樹達の説をとりあげ、それに反対し、古人が声調交替によつて原始詞と滋生詞を区別しているのならば、それらの間の語義の差がいかに小さくあらうと、やはり一義ではなく「一義とみなすべきである」とし、その例として「將」が平声では「ひきいる」の意味であるが、去声では特に「軍隊を率いる」の意味となることを挙げ、このような「特指構詞」であつてもやはり造語は行われていると述べる。次に、変調構詞には、原始詞と滋生詞とで語義に差はないが、滋生詞は専ら複合語の中でのみ用いられるという類型が存在するという、Downer等の説を批判し、その挙げる所の例が不適当である」とと、漢語にはそのような類型の造語法が存在しないことを示す。統いて、漢語における変調構詞の性質について、それが語義を区別するためのものであるのか、品詞を区別するためのものであるのかという問題を提出し、古代漢語の変調構詞においては、原始詞と滋生詞の品詞は異なるが語義は同一であるという例は存在せず、変調構詞における品詞の変化は語義の変化に付随するものであることを指摘する。そして、先行研究で変調構詞に品詞の区別と語義の区別との複数の効能を認めることを批判し、實際

には全て語義の区別である、すなわち変調構詞は造語法であるという見解を提出する。その根拠は以下の通りである。第一に、漢語の変調構詞では原始詞が消滅した後にも滋生詞の音義は残存することができる。第二に、西欧言語の所謂活用や曲用では品詞に変化は生じないが、漢語の変調構詞では品詞に変化が生じ得、そのようなものは活用とは考えられないこと。第三に、漢語の変調構詞では、滋生詞が原始詞となり、再び新たな滋生詞を生ずることがあるが、これは造語法に特有のものであること。第四に、西欧言語の活用は類推可能であるが、変調構詞は類推不可能であること。第五に、漢語の変調構詞では、異なる声調が同じ文法的作用を持つことでも、同一の声調が異なる文法的作用を持つこともある。結果として、漢語に占める二音節語の割合が上昇していく時期にも、変調構詞が行われ続けていたことが例を以て示され、その原始詞と滋生詞が異なる語であることが明らかであるとの同様、古漢語における変調構詞も、原始詞とは異なる語である滋生詞を生み出していたのであると論理が展開される。統いて、漢語の去声は後に発展した（後起）ものであるという意見に対し、「後起」ということは、①他の声調と比べ、去声の発生は遅かつた、②去声は魏晋時期に発生したため、上古時代には去声は存在しなかった、という二通りの理解があることを述べる。そして、いずれにせよ、去声の発生が遅かつたというのは、平声に読まれる原始詞に対して去声に読まれる滋生詞の発生が遅かつたというだけであり、上古時代にも去声を利用した変調構詞が行っていた以上、去声は既に存在していたということを主張する。次に、去声や長入声が変調構詞で利用される原因について、それらの声調が担う形態素が少なかつたために、造語に利用されたと述べ、原始詞と滋生詞の語義が異なれば、それらの間の関係がどのようなものであっても、一律去声によつて滋生詞が作られたとする。最後に、原始詞と滋生詞を一語の多義であるとみなすことができないかという疑問に対し、原始詞と滋生詞は音・義ともに異なる二語であり、これを一語とみなすことは言語分析上不適切であると述べる。

「論所謂經師注音不一致」では、古代の注釈者の変調構詞に対する注音が一致しない例についての考察が行われる。まず、同じ語義であるにもかかわらず、音注が或いは付され或いは付されないような例について、既に出現した字については「下同」のような注記で以下省略することがあること、次に、版本自体の問題が存在すること

と、また、常用字であるために、破読音であつても注が付けられない場合があること、更には音注自体が他のさらに古い音注からの引用である場合があること、体例の不一致により注音が不一致に見える場合があること、また、六朝期は変調構詞が既に衰退した時期であり、注釈者によつて伝統的読書音への処理方法が異なつたことを原因として挙げる。続いて、同じ語義であるにも関わらず、注される音が一致しない例について、版本の問題の他に、文脈の中での被注字に関する語義の理解の不一致や、前後の異文や句讀の違いによる不一致、変調構詞の方言による違い、注釈者間での時代差による語音変化の影響、旧説に対する扱いの不一致、注釈者の変調構詞に対する認識の誤りを挙げる。これらの注音の不一致は、説明可能なものであり、変調構詞人為説の根拠とはならないといふことが主張される。

第二節は「論変調構詞中の字和詞」と題され、変調構詞と文字表記との関連が議論される。ここではまず、原始詞と滋生詞の文字表記に、①「勤」と「観」とのようになつたく異なる字が用いられる、②「受」と「授」とのようになつたく同一の字「受」で表記されていたが、後に滋生詞のために新たな字が作られる、③「欲」と「慾」とのようになつたく同一の字「欲」で表記されたことから、声

たが、その字がやがて用いられなくなつた、④「好」の上声と去声のように、同一の字を用いて表記されるという、以上の四通りの関係があることを示す。以上四通りの他に、「受」の滋生詞である「授」が、原始詞を表記するのにも用いられ、その場合は原始詞の声調で読まるという例や、「漁」が現在平声で読まるように、滋生詞を表記する字が本来破読音で読まれていたが、破読音の消滅に伴い、原始詞の音で読まれる例、原始詞と滋生詞にそれぞれ複数の専用字が作られる例、原始詞と滋生詞とともに仮借字で表記される例、滋生詞を表記する文字が他の語を表記する文字と同形となる例、一つの原始詞から複数の滋生詞が発生し、原始詞と同じ字でも異なる字でも表記されうる例が挙げられ、変調構詞研究の際には、異なる文字で表記されている資料にも注意すべきことと、字形に惑わされてはならないということを指摘する。

第三節は「論変調構詞和詞義構詞的関係」と題され、声調が先か造語が先かといふことについての議論を行う。漢語の中で、原始詞と滋生詞の語義が既に分化し、声調も分化しているにもかかわらず、分化した複数の声調が自由に交代する例は見いだされず、声調が先に分化していたとすると、時系列上矛盾をきたすことから、声

調の分化が先ではないことを示す。続いて、どのような新語であれ、発生直後には臨時的な性質を持ち、その時にはまだ新たな声調によって原始詞と滋生詞の区別は行われず、そのような区別は時を経てから行われるようになるということを述べ、変調構詞は詞義構詞（変調を伴わない造語）の前提があつて行われるということを示す。次に、ある新語が方言によつては変調を伴わない詞義構詞であり、また他のとある方言では変調構詞であるということがあり得ることを示す。最後に、もとは原始詞と滋生詞で声調が異なつたものが、声調が混同され、原始詞も滋生詞も同一の声調で読まれるようになつた例もあることを指摘する。

第四節は「論変調構詞和変声構詞、変韻構詞的関係」と題し、広く見た音変構詞における、変調構詞以外の造語法と変調構詞との関係を議論する。ここではまず、一つの原始詞から、様々な声調の複数の滋生詞が発生する例として、重（重なる・平声）・重（重い・上声）・重（繰り返す・去声）などを挙げ、続いて変調構詞と変声構詞との双方が用いられている例として、引（引く・余母上声）・引（靈柩を引く・馬を引く帶・余母去声）・引（牛を牽く縄・定母上声）などを挙げる。さらに、変調構詞と変韻構詞との双方が用いられている例も、行（道

路・戸庚切）・行（行列・胡郎切）・行（輩分・去声）を挙げて説明する。さらに、原始詞から音変構詞によつて生まれた滋生詞が、再びそれ自身原始詞となり、また新たな滋生詞を生ずることも示され、変調構詞・変声構詞・変韻構詞の複雑な関係が強調されている。

第五節は「論変調構詞中原始詞和滋生詞の関係以及変調構詞的分類」と題し、「論古人確定原始詞和滋生詞の原則」「論変調構詞中原始詞和滋生詞の関係」「論変調構詞・変韻構詞の複雑な関係が強調されている。

「論古人確定原始詞和滋生詞の原則」では、古人が変調構詞に言及する際に、いかなる原則に基づいて「如字」音と「破讀」音を判別していたのかということを議論する。ここではその原則として、①字形の影響、『說文』によつて確定された本義による、②当時の口語の影響、当時の人にとって最も一般的な読音を「如字」音とする、③「如字」と「破音」の音義の派生関係に対する見方の三点を挙げる。そして、この中で最も重要なのは、②当時の口語の影響であったとする。そのため、古人の「如字」音は本義の音である可能性が高いとはいえ、現在変調構詞の研究を行う際には、古人の「如字」や『說文』の本義に拘泥してはならないと主張する。古人の「如字」が本義と一致しない例として、「度」

は去声音が「如字」とされるが、実際は入声音が本義であるといった例を挙げる。

「論変調構詞中原始詞和滋生詞的関係」では、原始詞と滋生詞ともに多義語である場合の問題が議論される。そのような場合には、原始詞のいずれの意味から、滋生詞のいずれの意味が直接生じたのかということを明らかにしなければならない。この点において、前人の研究には不備が多いことを指摘し、「下」「雨」の去声の読みが実際には上声の動詞から直接生じたものであるのに、名詞から生じたものであると誤解されていたことや、「首」の「自首」義が、「人の頭」から直接生じたという説明不足の説などを挙げる。また、同一の原始詞から派生した複数の滋生詞が同音となり得るとし、例として「长短」の「長」から、去声で読まれる「長さ」の「長」と「余分な」の「長」がそれぞれ派生し、同音異義語を形成していること等を挙げる。そして、以上のような事実から、原始詞から複数の滋生詞が派生する際に、それらの滋生詞は同一の声調を利用することもあり、また滋生詞間の語義は全く異なるということもあり得るため、声調というものが特定の形態の標識であるという考えは不當であるとする。

「論変調構詞的分類方法」では、これまでの学者たち

が変調構詞を、語義を変化させるものと文法的役割を変化させるものとに分類していたことを不十分とし、変調構詞の分類は語義の発展の流れによつてなされなければならないということを主張する。著者はその内容を具体的に、王力『同源字論』の挙げる、道具・対象・性質作用・共通性・特定指示・行為者受動者・抽象・因果・現象・原料・比喩婉曲・形状の類似・数・色彩・使役の他に、意動（形容詞から、「対象物を形容詞と思う」という語を派生させること）・受身を加えた分類としている。

第六節は「論上古漢語已有変調構詞」と題し、「從漢魏經師音注論上古後期已有變調構詞」「從漢魏韻文論上古後期已有變調構詞」「從語言的變化論上古漢語已有變調構詞」「從上古聲訓論上古漢語已有變調構詞」「從詞義的演變論上古漢語已有變調構詞」「從字形的分化論上古漢語已有變調構詞」「論清儒否定上古漢語已有變調構詞的理由不十分」の十の部分から構成される。この節の趣旨は、上古期に既に変調構詞という現象が存在しており、その存在を示す確たる根拠を提出することである。

「從漢魏經師音注論上古後期已有變調構詞」では、そ

の題の通り、漢魏の音注にも変調構詞現象が反映されていることを示したうえで、清代の学者たちが六朝の学風を嫌い、変調構詞も六朝經師の人為的創作であると考えたことに対し、彼らが高く評価した漢代の学風の中にも変調構詞の存在を証明する根拠があるのであるから、「經師人為」説は成り立たないと主張する。

「從漢魏韻文論上古後期已有變調構詞」では、漢魏の韻文も変調構詞を反映し、その内実は六朝の經師が注した音とおおよそ一致することを指摘する。また、韻文では原始詞が滋生詞の音で、或いは滋生詞が原始詞の音で読まれて押韻する例も存在するものの、このような例外を以てして通例を否定してはならないという注意を述べる。さらに、韻文の韻脚認定においては、変調構詞現象に常に注意すべきであり、誤った韻脚認定を行うと、かえつて変調構詞の存在を一見否定するかのような例が得られる場合があるということを示す。

「從語音的變化論上古漢語已有變調構詞」では、「度」

(入声「はかる」)・「度」(去声「度合」)のように、原始詞と滋生詞が入声と去声との組となるような変調構詞を挙げ、これらは中古音系においては主母音を異にし、上古音系内においてのみ、短入声と長入声という対応関係を為しうるのであるから、これもまた、中古音と同時代

の六朝經師による人為説を否定し、変調構詞が上古期に既に存在していたという根拠となるということを指摘する。また、このように、原始詞と滋生詞の間に成り立つ音声的関係が、中古音では説明できず、上古音でのみ説明できる場合には、その変調構詞が生まれた時代を上古であると確定することも可能であると主張する。

「從詞義的演變論上古漢語已有變調構詞」では、「毛」の去声の「毛色のさっぱりとした家畜を選ぶ」という意味は、上古期の礼制の中でのみ有用な語であり、その発生も六朝ではありえないといった例や、「衣」の去声の「着る」の意味は、六朝期においては「著」で表されることが普通であり、その発生も六朝期ではありえないといった例をもとに、六朝以前に既に言語現象として変調構詞が存在していたことを示す。また、六朝期には先秦の変調構詞の一部が衰退の途上にあり、『經典釋文』にみられる注音の混乱はそれによるということを指摘する。

「從語法的發展論上古漢語已有變調構詞」では、言語

一般の法則から、上古漢語に変調構詞が存在した蓋然性を示す。ここではまず造語法の方面から、漢語が歴史的に単音節語を好む傾向から二音節語を好む傾向へと移り変わったことを考慮すれば、既に二音節化の傾向が顕著

であつた中古時期に、新たに一音節語の変調構詞が行われたといふのは矛盾であるということを主張する。続いて、品詞の方面から、変調構詞によつて生産された新語は共時的文法体系と密接な関係があり、それによつて上古漢語の変調構詞を実証する。ここでは反復数詞「三」（去声）を例に、南北朝時代には基数詞から反復数詞を作つたための「度」「遍」等の使用が始まり、「三」（去声）の反復数詞用法は衰退の途上にあつたのであるから、この変調構詞は上古のものであるとする。最後に文構造の方面から、上古漢語から中古漢語にかけて、「使役動詞+名詞+動詞」の使役表現の使用や、同様の受動文の使用が増加し、変調構詞はそれに伴つて重要性を失つたのであって、使役文型や受動文型の未発達であつた上古時代こそが変調構詞の活躍した時期であったと述べる。

「従上古声訓論上古漢語已有変調構詞」では、漢代の声訓の中でも、「宿、宿也。星各止宿其處也」のように、被訓字と同じ字を用いて注記が行わるもの（原文「同字為訓」）に注目し、このような例では被訓字が滋生詞で、訓釈字が原始詞であることが多いことを指摘、このような声訓が行わることは、上古に既に変調構詞が行わっていたということを示すと主張する。

「従上古同源詞論上古漢語已有変調構詞」では、まず

同源字は全て同音であるという誤解を一蹴し、続いて、意味が互いに異なり、音声面では声調のみが異なる一组の同源字が存在すれば、それが上古漢語に変調構詞の存在した根拠となると述べる。その理屈は、同源字の双方が原始詞であるならば、もう一方は滋生詞があるので、滋生詞と原始詞の声調が異なることとなり、同源字の双方が滋生詞であるならば、それらの共通の原始詞は同源字の双方或いは少なくとも一方と声調が異なることとなるというものである。前者の例には「空（滋生詞）」、「孔（原始詞）」があり、後者の例には「巫（平声）」、「舞（上声）」がある。

「従周秦韻文論上古前期已有変調構詞」では、過去の学者たちが、韻脚字の意味を軽視してきたことを批判し、あらためて韻文が上古漢語における変調構詞の存在を示していることを述べる。

「従字形的分化論上古漢語已有変調構詞」では、「家」と「嫁」とのようないくつかの原始詞と滋生詞の分化が字形の分化をも招いた例について、もしそれが單に一語の多義であつたならば、字形の分化と後の音声の分化との一致の説明や、中古音との関連の説明がつかないと述べ、変調構詞は字形の分化に先立つとする。

「論清儒否定上古漢語已有変調構詞的理由不充分」で

は、あらためて清儒の説への批判が行われる。この部分の内容は既に述べられたことの繰り返しであるが、清儒が変調構詞を否定する根拠とした、韻脚字・二義同条・双閑語・六朝音注・類推・本義と引申義・声訓・異文・文脈などはどれも扱いを誤つており、根拠とするに足りないと主張する。

三、評者の所感

以上が内容の要約であるが、以下この内容に關して、評者の所感をいくつか述べておきたい。

まず、第二章は細かく節分けされているものの、その主張する所を抽出すると、おおよそ以下の三点にまとめることができる。第一に、変調構詞現象が上古漢語に既に存在していたこと。第二に、変調構詞はあくまで造語法であり、西洋の言語でいう活用や曲用とは異なること。また、変調構詞による語義の変化は予測不可能であること。第三に、上古漢語に声調、特に去声が既に存在していたこと。

変調構詞が上古時代に既に行われていたということに対する見解は、今現在これを否定する意見は通用しないであろう。この点に関しては、本書の議論の相手は現代の学

者ではなく清代の学者たちとなつておらず、水谷氏が既に書評で指摘する通り、我々日本人にとつては必要以上に徹底的と思われるほどに、清儒の説への反論が繰り返される。現在では、特に音韻学の分野においては、変調構詞の存在は既に前提として扱われており、本書が変調構詞の非虚構性をあらためて証明したことは、議論の前提の再確認としての価値があるかと考えられる。

変調構詞の性質についての主張は、本書において最も重要な部分である。まず注目すべきは、滋生詞と原始詞との間に成り立つ関係は多様かつ予測不可能であり、このことから、去声に特定の機能があつたと想定することは困難であるという指摘である。このことは、以下の部分で述べられている。

「这个去声绝对不能跟印欧语的构形形态比附在一起，无法归纳出某种或某几种抽象的语法意义来。由原来的声调转换为去声形成一个新词，只要新词和旧词词义不同，就可以用去声分担；因为新词和旧词之间存在多种语义滋生关系，所以去声所分担的语义关系也是多种多样的。同样，把去声跟藏缅语的^s联系起来，缺乏的证。」（三七九～三八〇頁）

同様のことは第五節でも重ねて強調される。

「有人把去声拟为〔^ス〕尾，并把这个〔^ス〕看作后缀，这是不对的。事实上，去声仅仅用来区别意义，变调构词中，原始词和滋生词之间词义的区别绝不是用词缀的几种意义所能概括得了的。」（四〇六頁）

本書において述べられるように、現在では、中古去声の由来として、韻尾^{*}を想定する説が広く行われております。中国語の去声字と同源であると考えられる、チベット・ビルマ系言語（主にチベット文語）の単語の中に、^ムを持つものが多数存在するということもその根拠となつてゐる。しかし、例えばチベット・ビルマの機能は、動詞の過去形を作る等の予測可能なものであり、中国語の去声による造語の多様性とは異なる。

この指摘は非常に重要であり、^{*}ムが特定の文法機能を持つた接尾辞であることを前提として、上古漢語の文法や音声を論ずることに大きな衝撃を与えるものであると思われる。さらに、接尾辞^{*}ムと鏡写しの関係にある、接頭辞^{*}ムの再構と、その性質の議論にも関連してくることは確実である。ただし、「原始词和滋生词之间词义的区別绝不是用词缀的几种意义所能概括得了的。」と

いう指摘については、接尾辞の基本的な機能が派生してくるという定説も、困難ではあるが可能ではある。

次に、変調構詞というものが、二音節語による新語の産出が盛んになつた時代においても、まだ新語産出の機能を失つていなかつたという指摘も重要なである。

「事实上，从两汉到明清时代，汉语史上仍然产生了大量的音变构词现象。（中略）这些事实说明汉语史上双音词占优势以后，单音节的音变构词法并没有失去构造新词的能力，而是继续发挥作用，构造了很多单音节的新词。」（三七三～三七五頁）

なぜこの指摘が重要であるのかには説明を要する。現在行なわれている上古音説では、上古漢語にはトーン（tone）声調は存在せず、後代の声調というものは、上古音の特殊な韻尾がもととなつて発生したというものがたり、その説の根拠の一つが、親族言語における^{*}ムの実在である。しかし、著者によるこの指摘は、中国語に声調が間違いなく存在した時代に、声調の変化による造語が実際に行なわれていたということを示すものであり、このような例がある以上は、声調の利用というのも造語

作用や派生作用を持ち得、それが上古にも行われていた可能性は非常に高いということは認められなければならない。これは、中國語における声調の発生時期という難問に対し、回答の幅を広げ得る指摘である。

最後は、上古漢語における声調、とくに去声の存在についてである。一般に、声調が存在しなかつたと主張する場合、そこには二段階のレベルがある。第一段階は、トーン声調は存在しなかつたが、その起源となる何らかの成分（韻尾^み等）は存在していたというものであり、

第二段階は、声調もその起源も存在していなかつたとい

うものである。本書で行われたほぼ全ての議論は、厳密に考えると、調類についてのものであり、調値についてのものではない。それゆえ、その主張では第二段階の意見を否定することはできるが、第一段階の意見は否定も肯定もすることはできない。本書における議論が「類」に関するものであるということは、四二一八頁でも言及されているが、他の部分を読む限りでは、著者の主張と声調韻尾起源説が両立し得ないよう感じられるため、読者側の注意が必要かと思う。

本書は清儒の説に対する批判であるとともに、藏緬語と漢語とを結びつけて考える傾向を持つ学者たちへの批判もあるが、厳密に考えるならば、その主張により、

去声の文法的機能を否定することは、漢藏学者たちが去声の由来であるとする^{*}が、文法的機能を持つ接尾辞であるという説は否定しえても、去声が音声的に韻尾^{*}に由来するという説自体を否定する根拠としては決して強力ではない。この点は「類」を議論の対象とした場合には必ず行きつく問題であるため、本書の価値には影響しないものであるが、今後の議論の中で本書は必ずや重要な役割を果たすであろうゆえ、ここで言及し、結びとする。

（書誌情報）

孫玉文著『漢語変調構詞研究』（増訂本）、一〇〇七年一月、全四四五頁、三十二開、横組